

# 乙姫城

妻木城址の会  
〒509-5301  
土岐市妻木町3051-1  
八幡神社社務所内  
TEL0572-57-6441

## 妻木の秋は賑わしい

歴史の町にふさわしい秋の行事をご案内いたします。  
九月のかがり火コンサート、十月の流鏑馬、十一月の文化財展と続きます。

## 杜<sup>もり</sup>のかがり火コンサート

柔らかな月の光と涼やかな夜風。かがり火に映える千年の鎮守の森。

聴こえますか。セピア色のフルートの音色、哀しいほど透きとおった子供たちの童唄、そして、人の出会いと別れを綴った歌とギターの調べが…。

フォークソングとフルート あなたの、あの日が蘇るフォークソングの数々をたっぷり聴いていただきます。秋の夕べにふさわしいフルートの演奏と児童合唱団の歌声も楽しんでいただきます。

出演 山名 敏晴 (歌とギター)

伊佐治 千里 (フルート)

元土岐少年少女合唱団員のコーラス

日時 九月十八日 (土)

開場 午後六時 開演 午後七時

場所 妻木八幡神社境内

料金 チケット 千円

☆境内の砂利に腰を下ろして聴いていただくことになり  
ますので敷物の必要な方は各自ご用意ください。

☆駐車場は近接の妻木小学校の校庭をご利用ください。  
☆雨天の場合は同小学校体育館に変更します。

主催 『杜の“かがり火”コンサート』実行委員会

共催 妻木公民館

妻木城址の会

チケットは城址の会事務局で扱います。当日会場にて  
も取り扱いますので、ぜひお出かけ下さい。

都会ではかなわぬ田園ならでの音楽のたのしみ方を探したい……。こんな願いをもって、本コンサートをひらくことにしました。秋の身支度を整えた八幡さまの境内が、あなたをお待ちしています。

### 出演者プロフィール

#### 山名 敏晴

☆五一年、東京生まれ

☆七三年、ポリドルレコードより自作の「忘れな草」でデビュー。

☆七四年、自作の「コーラが少し」が高木麻早の歌でヒット。ラジオのパーソナリティとしても七三年よりFM愛知、岐阜ラジオ、CBC等でさまざまな番組を担当。

☆八六年からは、ライヴハウス「パラダイスカフェ」のマネージャーとして、ジャンルをこえて多くのバンド、シンガー、演奏家をプロデュース。



☆現在、ライヴ・コンサート活動のほか「山名敏晴ヴォーカルスクール」でヴォーカル講師、「Yama n a ミュージックオフィス」としてプロデュース等でも活躍。  
☆CMソング、テレビ・ラジオ主題歌、挿入歌、社歌など作品多数。

#### 伊佐治 千里

☆六九年、土岐市生まれ。  
☆中学三年の春、吹奏楽のソロコンテストで地区金賞、県大会で優秀賞を受賞。

☆翌年、名電の吹奏楽部特待生となる。  
☆才能教育音楽学校卒業。  
☆現在、スズキメソードフルート科指導者

#### 元土岐市少年少女合唱団員

☆九〇年代に小学校で活躍した少年少女合唱団OBの皆さんで、当日、山名敏晴氏との競演が期待される。



## 勇壮華麗な伝統行事 流鏝馬

少年達が人馬ともに参道を駆け上がる八幡神社の流鏝馬は、元和九年（一六一三）に妻木城主妻木家頼によつて始められたといわれます。およそ三八〇年の長きにわたるに連綿と伝えられた勇壮華麗な神事です。古くより近郷近在から善男善女が集まって、少年騎手を囃したてる姿は今も昔も変わっていません。



## 武士の時代を体験しよう

妻木の文化財展は十一月七日（日）

恒例となりました文化財展は今年も崇禅寺の虫干しや八幡神社宝物展などをメインとして開かれます。呼び物の火縄銃の実演や手作りよりよい行列などがおこなわれます。

詳細は次号にてお知らせいたします。

### 短 信

本年度の発掘調査は秋にスタート

三年目をむかえた妻木城跡の学術調査が、秋から始まります。

昨年度の発掘では、城山山頂の本曲輪、二の曲輪、三の曲輪などから柱穴が発見されました。本年度の調査で妻木城の全体像が明らかになるものと期待されます。

### 本城林道に大雨の被害

城山山頂近くまで通じる本城林道が、大雨のため数カ所で土砂崩れが発生しました。林道上の土砂は取り除かれましたが、今後も落石の恐れがありますので現在一般車両は通行できません。

### 妻木一族の研究に御協力を

出版をめざして現在資料収集を精力的に行っています。昨年の妻木さんサミット開催以来多くの情報を提供いただきました。内容の充実をめざして鋭意努力中ですので今しばらくお待ち下さい。

どんなことでもけっこうですので、資料情報がありましたらお知らせ下さい。

## 【研究報告】

## 茶入『妻木』について

編集委員 水野幸爾

日本の茶書の古典の一つに『茶話指月集』というのがある。是は、千利休の孫、千宗旦の門人で四天王の一人、藤村庸軒の茶話を、弟子で女婿の久須見疎庵が筆録し編集したもので、庸軒没後二年目の元禄十四年(一七〇一)に板行されたものである。その中に妻木と名づけられた利休所持の茶入のことが書かれている。その一部を引用すると

ある時、今日庵主(千宗旦)、古(故)宗佐へ物語りに、「宗易(利休)は尻脹の茶入を嗜きて、二つまで所持す。一つは三斎(細川忠興)へ参らせ、一つは予が家に伝えたるを(中略)茶入は、あめ菓の一色なるものなり」いわれし。

附

利休は、静かなる数寄道具を好み、けうとき(気疎き)ものすごい、豪華な物を愛せず。妻木といえる所持の茶入も、あめ菓の一色にて侍るよし、みたる人のものがたり也。

これによると鉄釉の一色掛けの茶入で、たぶん尻脹の形をした茶入が妻木と名づけられて利休が所持していた。同じような茶入は二つあり、その二つともが妻木と名

づけられていたかどうか分からないが、一つは妻木氏と縁の深い、ガラシヤ婦人の夫である細川忠興に贈り、一つは宗旦の代まで所持していたが行方不明になっていることである。この記述が正しければ、当代の細川家の所蔵品の中に利休が贈った茶入が現存するかも知れない。

それよりも、妻木という名である。言葉の響きに鋭敏であった利休にとって「つまき」という響きは、茶入の名にふさわしく、床しいものであったのだろう。利休の当時名器の条件であった釉の二重掛けではなく、一色のこの茶入を秘蔵し妻木と名づけたのであろう。

この場合名前の由来は次の三つのケースが考えられる。

一、妻木某から贈られたことによる。  
一、妻木郷で焼かれたことによる。この場合でも土岐明智氏の一人であろう。

一、茶入が妻木(爪木)薪にするため(爪先で)折りつつた枝。たきぎ)と名づけるにふさわしい景色であった。

以上であるが、指月集に書かれたものと同種のものが土岐市から出土することを考えると、一又は二のケースによるものである。妻木町又は妻木氏(明智氏)と利休の接点が見られ興味深い。

参考文献 『茶話指月集』日本の茶書 東洋文庫



